

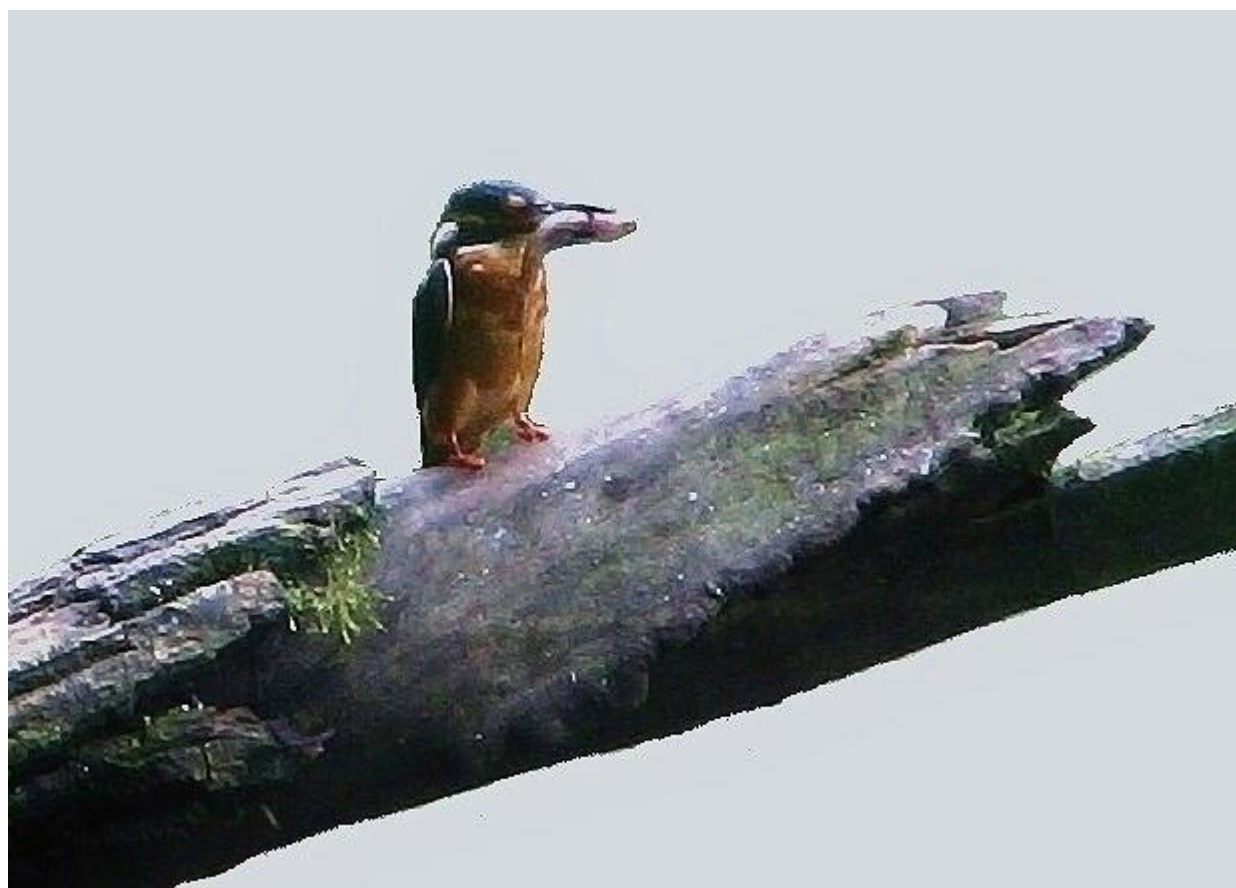


自然観察

No. 119
2016.9月

目次

・第27回滝野の自然に親しむ集い開催報告	2
・地方研修会「秘境 浮島湿原を巡る(上川町・滝上町)観察会」開催報告	4
・会費の早期納入についてお願い	5
・連載「豊平川の野生サケ」②	6
・参加者募集! 2016年度北海道自然観察協議会全道研修会	9
・連載 面白く楽しい自然ガイド(5) 錦大沼公園の春	10
・フィールドニュース	11
・ウォッチングレポート	12
・参加者の声	15
・2016年度北海道自然観察協議会指導員フォローアップ研修会のご案内	16
・連絡先	16



大きなヤチウグイをくわえ、ご満悦なカワセミ

野幌森林公園

8月

第27回滝野の自然に親しむ集い開催報告

～晴天に恵まれ、子供たちの歓声、森に響く～

本協議会の恒例の「滝野の自然に親しむ集い」（主催：北海道自然観察協議会、後援：札幌市教育委員会、札幌新星ライオンズクラブ）が今年も7月23・24日にかけて札幌市南区滝野にある滝野自然学園で開催され、真夏の青空が輝く晴天のもと、川、森に参加した子供たちの歓声が響き渡った。

今年で27回目を迎える集いは、当初、参加応募の出足が鈍く、実行委員会事務局も開催を懸念したところであつたが、最終的には本年から後援団体となった札幌新星ライオンズクラブからの強力な支援があつたことなどにより総勢29人の参加者となった。

参加者は、一般参加者が8家族18人、指導員参加者が11人となったが、このうち子供は10人、またリピータは2家族だった。

第1日目の23日は、午前11時から行われた入園式からスタート。

実行委員長の三澤英一北海道自然観察協議会理事による主催者挨拶の後、参加者同士が打ちとけあつて様々な経験を聞きあう「はじめましてゲーム」に移った。家族の自己紹介の後、互いに向き合つて生き物の飼育経験をはじめ木登り体験、森の中での動物との遭遇経験があるかなどをそれぞれ聞き合つた。

追い込み漁でニジマスを捕獲！

各自持参の昼食を食べた後、川の生き物を採取



してじっくり観察する「せせらぎウォッチング」に移った。ウォッチングの会場となった厚別川（アシリベツ川）の水温が意外と低くて、最初子供たちは冷たがっていたが、網を持って魚、水生昆虫を採取するうちに冷たさにもすっかり馴れ、夢中で魚取りなどに挑み始めた。今年は、例年になく網に入る魚類が少なく、カジカ、ドジョウなどに限られた。また水生昆虫も少なく、子供たちをがっかりさせた。

しかし、恒例になっている最後に行う大タモ網と小網を横一列に並べ立てて上流から一斉に追い込んでいく追い込み漁では、

待望の20cmほどのニジマスが入るなど大いに盛り上がった。

採取した生き物は、それぞれに分けられた水槽とバットに移され、採取した生き物の特徴などの説明が行われた。また川から採取した水にリトマス紙を浸して変化した色合いを見て硝酸、亜硝酸態窒素の汚染度を子供たちに判定してもらったパックテストも行われ、アシリベツ川の水質がきれいなことが確認された。

これら採取した魚などは、観察会の終了後、すべて子



供たちの手で元の川に返された。

マッチの点火に手間取る子供達

せせらぎウオッチング終了後、休息をとった後、学園正面玄関前で参加者全員による記念写真を撮って、次の「夕食作り」にかかった。

メニューは恒例のカレーライス。その前に行われたのがカマドづくりと薪割りの準備。とくに薪割りは子供たちに実際に体験してもらうことで、指導員がナタの握り方、薪の割り方を手を取りながら指導。初めて体験する子供も多く、初めは危なそうな様子だったが、次第に馴れ最後は上手に割れるようになった。

カレーライスづくりでは、具材の調理、鍋の洗浄などは、参加したお母さん方が行った。カマドに火を入れる段階で、子供たちにマッチによる着火をしてもらったが、これがなかなかスムーズにいかなかった。ほとんどの子供たちが、マッチ自体を見たことも触ったこともないゆえ、点火するのも容易ではなく、手間取った子供も多かった。

カレーのレシピでは、若いお母さん方も参加しているということもあって、オーソドックスなものと同マヨネーズ入りという2つのメニューが用意された。

食事は、輪切りをした丸太を足の上に平板に乗せた大きな簡易テーブルを2つ作って、これまた輪切り丸太をイスにして大家族のように和気あいあいと食べたので、何度もお代わりをする人もいた。

食事の後は、ライオンズクラブから提供されたスイカを使っての子供達による「スイカ割り」が行われた。



キャンプファイヤー、ナイトハイク、星空観察と連続した催しが続く

食事後は、子供たちにとって大きな楽しみである「キャンプファイヤー」を皮切りに、「ナイトハイク」、「星空観察」と次々と楽しいワクワクする催しが行われた。

キャンプファイヤーは、三澤実行委員長がファイヤーの営火長となって、点火棒を持ってエンゼルに扮した男の子と女の子を従えて会場に入場。営火長の指示による点火後、学園職員が司会者となってファイヤーの炎の勢いを増すよう「燃えろよ、燃えろよ」の歌の合唱が行われた。その後、歌を歌いながら全身を使って様々な振り付け、踊りなどを行うなど楽しいひと時を過ごした。



すっかり周りも暗くなって次に行ったのが、ナイトハイキング。灯り一つ無い真っ暗な森の小径を連なって五感を使って歩くものだが、日頃、全くそのような経験が無い子供たちにとっては、おっかなビックリだったようだが、無事全員歩き通した。

戸外での1日目の最後のイベントとなったのは、星空観察。心配された雲もなく、近年にない絶好の星空観察となり、屋外に敷かれたブルーシートに全員、仰向けに寝転んで夜空を見上げた。横山会長の星案内の説明を受けながら、観察となったが、夏の大三角、北斗七星などの星座はもちろんのこと、流れ星、人工衛星なども見られるなど素晴らしい観察会となった。第1日目のフィナ

ーレとなったのは、校内食堂で行われた懇親会。大人はもちろん、子供たちも参加して、遅くまで語り合うなど盛り上がっていた。

カエル、トンボ取りに夢中となった自然観察ハイキング

第2日目も朝から青空が広がる好天。6時半の朝のラジオ体操の後、朝の散歩に移り、アシリベツ川のほとりを散策したが、例年になく発見できた昆虫も意外と少なかった。

朝食の後、自分たちの泊まった部屋(教室)などの清掃を行った。2日目のメインイベントである「自然観察ハイキング」を行うため会場となっている滝野の森ゾーン(西エリア)に移動した。

参加者を2班に分けて、指導員が散策路沿いにある自然をそれぞれ解説をしながら進んだ。

自然探索路の広場の一つである田んぼ広場に到着すると、カエル、トンボ、ヤゴなどの水生生物



がたくさんいるということもあって、子供たちも網を持って夢中になって採集。尻尾の付いたものなど生育段階が異なるカエルの子をつかんだり、オニヤンマのヤゴをすくったりするなど、歓声が響いていた。

散策を終えてハイキングのスタート場所だった森の情報館に戻り、昼食を取りながらハイキングの際、感じた匂いのするもの、鳥の鳴き声、田んぼでの生き物などを書きとめて発表し合う「森のフィールドビンゴゲーム」を行ってすべての日程を終了して解散となった。
(村元 健治)

地方開催研修会

「秘境 浮島湿原を巡る(上川町・滝上町) 観察会 ～湿原と湿原周辺大地をじっくり観察～」 開催報告

山口 紘司 (津別町)
相原 繁喜 (遠軽町)

7月10日(日)、「秘境 浮島湿原を巡る観察会(上川町・滝上町)」を開催しました。

地方開催研修会に位置づけて戴き、旭川・紋別・幕別・湧別・津別・遠軽からの参加者を得て、時中一瞬の小雨以外は天候に恵まれ、予定していた日程通り実施。

浮島湿原～黒褐色の水を湛えた池塘周辺での生き物の観察～

「秘境、浮島湿原の自然を知る」観察では、浮島湿原の基盤を成す地質に触れてからアカエゾマツ林に囲まれた台地上に広がる湿原景観を観察。モール温泉のような黒褐色の水を湛えた池塘周辺には青色のエゾイトトンボが飛び交い、モウセンゴケ、ツルコケモモ、ヒメシャクナゲ、ワタスゲ、タチギボウシ、ミズゴケ類、チングルマ、エゾヒツジグサ、ホロムイ



リンドウ、アカミノイヌツゲ、イソツツジ、トキソウ、ゼンテイカ、アカエゾマツ(矮性樹)等々を観察。途中、倒木更新後のエゾマツの様子やサルオガセ(地衣類)の相利共生の紹介、そして池塘水の酸性度について比色検討、さらに泥炭の堆積速度の紹介や水深が1.5mを超える池塘では、エゾヒツジグサ(抽水植物)が生育しないなど、池塘での植物の生育環境を観察。その他、耳を澄まして野鳥の鳴き声の聞き分けを実施。また、湿原観察の帰途、幸運なことにエゾライチョウのファミリーを観察できました(報告写真は幼鳥)。

湿原周辺大地～黒曜石の転石露頭の遠望と湧別川流域大地の俯瞰～

次に北見峠を越え、「湿原周辺大地(白滝)の成り立ちを知る」観察では、遠軽町埋蔵文化財センター(白滝)で、幌加湧別カルデラ内に噴出した流紋岩溶岩の外皮として形成された黒曜石の概要と周辺大地の成り立ちを学んでから、十勝石沢路頭に端を発する十勝石沢川で黒曜石の転石路頭(梨肌黒曜石)を観察。

次に北大雪スキー場付近の天狗平展望台に移動し、黒曜石の原産地を遠望しながら火砕流のつくったパノラマが広がる高原台地から湧別川の流路に沿って形成された大地について俯瞰した。

北海道自然観察協議会主催の観察会を担当するのは初めてでしたが、参加された方々から「普段何気なく通り過ぎていた道東のこの地にも、視点を少し変えるだけで、感動的で多くの見学に値する自然が存在することが解りました!」とか、「動植物の生活を支える気象や大地の成り立ちを知ることも大切だと感じた!」という声を頂戴し、安堵の念をもって無事終了したことを報告します。

観察会の実施に当たり、ご支援を戴きました会長様はじめ関係会員の皆様に心より感謝申し上げます。何らかの形で今後も道東の観察会を継続実施したいと思います。



—会費の早期納入についてのお願い—

日頃から、当協議会の活動にご支援をいただきありがとうございます。

本会の活動は、会員の皆様から寄せられる会費を唯一の財政基盤としております。これらの運営をスムーズに進めるためにも、会費を早めに納入いただけますよう、宜しくお願いいたします。

- 27年度から年会費は、個人会員は2000円、家族会員は3500円になりました。
- 会費未納の方のみ振込用紙を同封しましたが、行き違いで納入された方はご容赦ください。封筒宛名タックシールに納入状況を記載しておりますのでご覧下さい。• 会員台帳と出納簿でチェックしていますが、もし間違いがあれば至急事務局もしくは会計までご連絡をお願いします。• 退会の申し出あるまでは会員です。本年度をもって退会される方は、28年度までの会費を納入の上、事務局または会計担当までご連絡下さい。

郵便振替口座 02710-1-8768 会費振込加入者名 北海道自然観察協議会会計杉本 泰子



連載『豊平川の野生サケ』

② 豊平川のサケ調査 今までに分かったこと、これから取り組みたいこと

岡本 康寿（札幌市豊平川さけ科学館館長、札幌ワイルドサーモンプロジェクト共同代表）

はじめに

札幌の母なる豊平川に遡上するサケ、その野性味を高める取り組みとして始まった「札幌ワイルドサーモンプロジェクト（SWSP）」について、この連載では引き続き、活動の内容や目指すところについて紹介していきますが、2回目の今回は、このプロジェクトの基礎となった豊平川さけ科学館のサケ調査（図1）について紹介しつつ、豊平川のサケについての理解を深めていただけるよう、ご案内したいと思います。



図1 標識調査で初確認されたサケ（2006年10月）

1. サケの生態と河川との関係

本題に入る前に少しだけ、予習としてサケの生態に関連したお話をします。

サケの一生は川で始まり、やがて海に出て長い距離を回遊し、最後は生まれた川で繁殖をして一生を終えます。川と海を行き来する魚は他にもアユやウナギ、シシャモなどがいますが、サケは繁殖のため（だけ）に川を遡上する「遡河（そか）回遊魚」に区分されます。

親サケは川の上流まで遡上するというイメージがありますが、産卵場所は一般に中流域が中心となり、豊平川では、札幌の市街中心部付近からやや下流にかけてとなります。地形的には、上流の山地と下流の平地の間にある扇状地、特にその下流端を中心とした範囲が湧き水も多く、川底の石の大きさも適度で、サケの産卵に適しています（図2）。



図2 護岸から出ている湧き水（豊平川・東橋下流）

海から産卵場所までの間にサケが越えられない障害物があると、当然、その川での繁殖（自然産卵）はできなくなります。サケの人工ふ化事業が行われている河川では、捕獲用のウライ（川を横断する柵）を産卵場所より下流に設置しますが、ウライ撤去後の冬に遡上してきたサケが自然産卵している河川や、近年は一部を意図的にウライの上流に上らせる事例もあるようです。

ウグイやハゼなど、豊平川にすむ他の魚の多くは春から初夏にかけて繁殖し、秋までにある程度成長して冬を越しますが、サケはそれとは異なり、秋から冬にかけて産卵します。卵は川底に埋めることによって守られ、稚魚となって泳ぎ出すまでに半年近くもかかります。エサのない川底で長く厳しい冬を乗り切るため、サケは大きな卵を産み、大きな栄養をおなかに付けて生まれます。

河川の工事は、川の水量が安定する冬期に行われることが多いのですが、重機による作業や泥水などによって、川底のサケの卵や赤ちゃんは大きなダメージを受けるため、細心の注意が必要です。

2. さけ科学館のサケ調査で分かったこと、分からなかったこと

カムバックサーモン運動の成果として、1981年秋、豊平川にサケの遡上が復活しました。その3年後、1984年の秋に札幌市豊平川さけ科学館が開館し、その後の豊平川のサケ調査は、さけ科学館

の業務として続けられてきました。

私がさけ科学館に勤め始めた 1989 年（当時はアルバイトでした）、豊平川のサケは、「網を投げたり引いたり、がんばって捕まえた数」を「遡上確認数」として公表していました。

「サケを捕まえるのが仕事だなんて、なんて素晴らしいんだろう！」とウキウキしながら捕獲、測定、放流の作業を連日していましたが、そのうち「こんなにサケが散らばって産卵したら、とても全部は捕まえきれないし、どんなにがんばっても、あまり正確な数じゃないよなあ」と思うようになりました。

その翌年、サケシーズンの前に、豊平川の産卵範囲を 11 区間に区切り、流れと橋や堰堤などの目標物を記載した白地図を作りました。これを持って、サケの産卵時期に一定間隔（10～14 日）で川を歩いて下り、サケの産卵床（さんらんしょう、産卵した場所）の位置と数を地図に記録しました。実はそれまでも産卵床の調査は行われていましたが、一貫した取扱いのできる記録としては不十分でした。

川の中を延々と歩くのはなかなかの重労働ですが、この調査を続けることで、その年の産卵場所、季節による変化、また経年の変化などが明確になりました。さらに産卵したメスザケの数分かるため、性比の検証と合わせて、遡上の実数により近い「遡上推定数」の公表に切り替えることができました。これにより、遡上数を求めるための捕獲努力は不要になり、採卵用個体の確保と個体データのサンプリングだけで OK と、こちらはずいぶん楽になりました。

この産卵状況マップのデータは、豊平川の河川工事の際、サケの繁殖に影響を及ぼさないための検討資料として大いに活用されています。河川工事によるサケへの影響・被害については、当時は色々ありましたが、今では施工の前にサケや川の生物に対する配慮が細かく検討されています。

現在の豊平川の産卵床調査では白地図に代わり、ハンディ GPS で正確な位置を記録していますが、これほどの長期間にわたって同一河川でサケの自然産卵の調査が続けられている事例は、日本では他にないと思われます。この調査を通じて、これまで経験的には何となく感じていたことが、データとして検討できるようになり、そこからさらに色々調査や検証を進め、豊平川において分かってきたことも増えています。

ひとつには、サケの産卵場所選択についてです。前期（9 月下旬～11 月上旬）と後期（11 月中旬～1 月上旬）のサケでは産卵場所が大きく異なり、後期は産卵範囲の下流側に多い、地下水由来の湧水がある場所に集中します（図 3）。

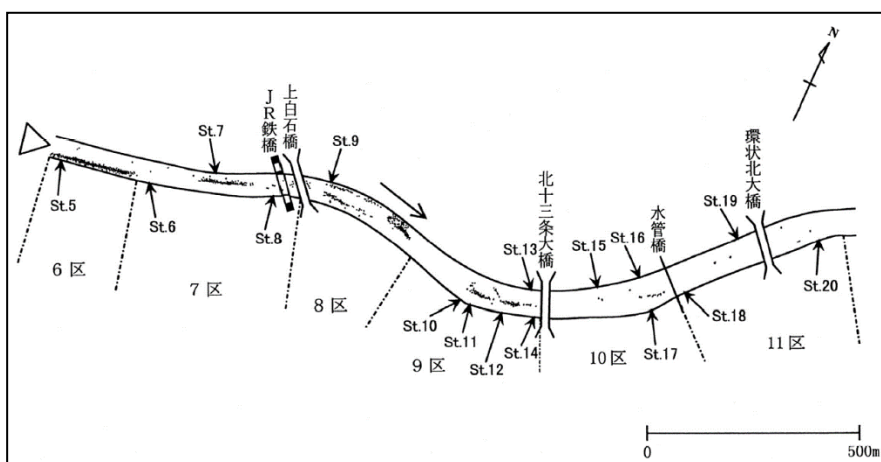


図 3 産卵床と湧水の確認地点（さけ科学館報第 9 号より）

しかし、工事の関係者にとってはやっかいなことです。そこで、さけ科学館の発案をきっかけに「産卵防止ネット」という工夫が生まれました。これは、サケが産卵すると困る場所の川底に、事前にプラスチック製のネットを敷くことでサケが掘れないようにし、別の場所で産卵してもらう、というものです。今では豊平川以外の河川でも活用されています。

いっぽうで、川底を柔らかくすればそこにサケが産卵する可能性が高まることから、この知見は昨年始まった SWSP の川底耕起プロジェクトにもつながっています。



もうひとつ、豊平川のサケの産卵範囲には、床止工（とこどめこう）という人工の落差（障害物）が複数あり、上流への遡上を阻んでいました（図4）。1990年代に入り、床止工に順次魚道が設置されると、特に前期のサケの遡上・産卵は上流に広がったのですが、後期の産卵場所に大きな変化はなく、上流側ではほとんど産卵しませんでした。このことを前期のサケの立場から考えると、あとから来たサケに自分の産卵場所（卵）を掘り返されるリスクを回避す

るため、上流を含む広い範囲で産卵場所選択をしている、という考え方もできます。前述の湧水への選択性の違いと合わせて、時期によって産卵場所を変えることにより、河川の限られた産卵環境を効率的に使っているとも言え、興味深いところです。

これらの成果の一部については、さけ科学館のホームページで公開されている館報第5, 6, 8, 9, 10, 12号に報告されているので、興味のある方はご覧ください。

このように、調査によって色々な事が分かってきたのですが、それでもこの産卵床調査だけでは分からず、しかしなんとかして知りたい！という疑問点が、豊平川ではまだふたつ残っていました。

- ①放流したサケと、自然産卵生まれのサケ、遡上した親ザケでの割合はどうなっているか
- ②豊平川の約100倍も遡上する千歳川のサケが一部、豊平川に遡上しているのではないか

3. そして標識放流へ

そういった疑問はあったものの、これ以上の調査をするには、当時の（今でも）さけ科学館にはお金も人も足りませんでした。そんな折、さけ・ます資源管理センター（当時、現在は水産研究・教育機構 北海道区水産研究所）から共同研究の申し出をいただき、技術面も含めて大きな力を得ることができました。

そこで次に行ったのは、この連載の1回目でも紹介した、サケ稚魚の脂びれを切る標識放流です。これにより、上記の疑問①については（都合8年掛かりましたが）、自然産卵由来（野生魚）が69%を占めるといふ答えが出ました。

現在さけ科学館で行っている標識は、耳石（じせき、サケの頭の中にある小さな骨）に模様を付ける方法ですが、これは当時、千歳川の放流サケには付けられていました。そこで、疑問②の答えを出すため、豊平川で産卵後に死亡した親ザケから耳石を取り出して標識の有無を調べたところ、千歳川生まれのサケはほとんど豊平川には遡上していないことが判明しました。

4. 豊平川のサケと札幌市民の未来の関係に向けて

さて、豊平川のサケについて、これまでの調査で分かってきたことを受けて、今後の方向性を定め、取り組んでいくために立ち上げたのが札幌ワイルドサーモンプロジェクト（SWSP）です。

SWSPの活動は札幌市民の理解、参加により進めて行く必要があります。そのためには、豊平川のサケと市民がもっと気軽に接することのできる環境の整備、これが現状の大きな課題です。

豊平川の中流域では近年、流路の固定化が進んで河畔林の樹木が大きくなり、河川の見通しが非常に悪くなっています。せつかく1,000尾ものサケが産卵していても、なかなか観察に適した場所が少ない状況です。また以前は、魚道設置前の床止工の下でジャンプするサケや、頻繁に行われていたさけ科学館による捕獲作業を観察する市民も多かったのですが（図5）、今ではその機会が少なくなってしまい、「目に触れないことによる関心の低下」は間違いなく進んでいると思われます。

この問題への対応のひとつとして昨年から始めたのが、川でサケの写真を撮影して投稿してもらう「みんな



図5 サケの観察会で捕獲風景を見る参加者（1994年）

でサケさがそ！」ですが、ほかにも、川底の耕起によって観察しやすい場所にサケの産卵を誘導することや、豊平川の高水敷（河川と堤防の間の緑地）にサケの産卵環境を造成して豊平川と水路でつなぎ、そこにサケを呼び込めないかというアイデア、また現地でサケの観察をサポートするボランティアの育成など、色々な方法が考えられます。

SWSPには現在、行政や各種の関係機関、研究者、マスコミ、まんが家、デザイナー、そして活動に興味をお持ちいただいた一般の方など、様々な人たちが集っていて、多様なアプローチと連携の力により、順調に活動を進めてきました。今後は特に、市民のみなさんにより一層の関心を持っていただくための方策をしっかりと検討し、取り組んでいきたいと思えます。（続く）

参加者募集!

2016年度 北海道自然観察協議会全道研修会 『秋のブナ林とニセコ神仙沼の自然を巡る研修会』

黒松内町に広がる歌オブナ林とニセコの神仙沼を歩き、北海道最北のブナの自然林や植物相の分布を体感する。

日時 2016年10月22日（土）～ 23日（日） 雨天決行

行程 第1日：JR札幌駅北口＝（札幌道経由）＝黒松内町ブナセンター＝歌オブナ林
＝歌オ湿地（道路からの観察）＝いわない温泉「おかえりなさい」（宿泊）

* 夕食後 研修会・懇親会

第2日：早朝散策・朝食 いわない温泉「おかえりなさい」＝ニセコ神仙沼＝半月湖
＝JR札幌駅北口

※2日目、降雪等で神仙沼への道が閉鎖される時は、神威岬・島武意海岸・積丹岬へ行程を変更することがあります。

集合 (10月22日) JR札幌駅北口団体バス乗り場 8:15 (出発 8:30)

解散 (10月23日) JR札幌駅北口団体バス乗り場 17:00

交通 JR札幌駅北口駐車場から中型観光バス

定員 25名（申込順、参加者15名より実施）

宿泊 いわない温泉「おかえりなさい」〒045-0024 北海道岩内郡岩内町 91番地 21
TEL：0135-61-4111 FAX：0135-62-1444

【参加料】札幌からのバス利用者 16,000円～20,000円 現地集合者（宿泊のみ）7,700円
（参加者数により参加料金確定の予定。料金確定の後、参加者にお知らせします。）
参加料金は、当日（10月22日）の乗車受付時ご申し受けます。

【持ち物】トレッキングシューズ、リュック、雨具、防寒具、双眼鏡、ルーペ、筆記用具、洗面具、薬類（常備薬など）、着替え、ゴミ袋、防虫剤など、おやつ、水筒、**第一日目（22日）の昼食**

【問い合わせ先】横山武彦 TEL:011-387-4960、E-mail:y-hiko@rapid.ocn.ne.jp

【申込方法】①～③のいずれかで申込。

・申込先：

① 申込書様式に従って申込書を作成して封書で、または、ハガキに貼って郵送
宛先：〒064-0946 札幌市中央区双子山1丁目12-14 山形誠一

② FAX 送信：011-551-5481

③ E-mail：seiichi.y@jcom.home.ne.jp

* FAX送信、E-mailの場合は受けた旨をお知らせしますが、連絡の無い場合はお問い合わせください。

宿泊予約の都合上、早めの参加申し込みとなります。**※切 9月30日必着です**

2016年全道研修会申込書様式

氏名 男・女（○印）

〒 住所

TEL（携帯等）・FAX:

E-mail

その他

面白く楽しい自然ガイド

(5) 錦大沼公園の春

谷口 勇五郎

5月1日、久しぶりに1人で錦大沼公園（苫小牧市錦岡）に出かけました。晴れ、10℃ぐらい、風のない日でした。駐車場から覚生（おぼっふ）川に架かる橋を渡って行くと、道にドロノキが生えています。根元に冬芽を覆っていた芽鱗が多数と役割を終えたドロノキの雄花が落ちていました。キャンプ場にはキタコブシの花弁がかなり散っていたので、両者はだいたい同時ぐらいに咲くようです。どうやら、この辺の樹木はハンノキ類→ナニワズ→バッコヤナギ→エゾムラサキツツジ→ハルニレ→フッキソウ→ドロノキ・キタコブシ→シラカンバ→サクラの順に咲くように思います。小沼の方に進むと、木道沿いに20m四方が緑になっています。新米ガイドが始めに覚えるマイズルソウ（キジカクシ科）の絨毯でした。キジカクシ科というのは、葉緑体のDNA解析による被子植物の新しい分類体系：APGⅢ体系による科で、スズラン・タチギボウシ・ユキザサなどが所属しています。葉が2枚になり総状花序に約20個の白い花が咲き、球形の果実は赤くなって熟します。毒はないものの不味いと言います。葉の形を、羽を広げたツルに見立てたという。小沼の手前にスズタケが一面に枯れています。ササ類は約60年に一度花が咲き、実をつけ、枯れると言われています。再生に十数年かかる間に、樹木の実生が育つとか言います。コシアブラ（ウコギ科）が1cmほど緑の芽を出しています。誰かが、今年こそコシアブラを食べたいと話していたのを思い出しました。東北地方では山菜として人気があるのですが、私は昨年初めて食べました。ハリギリやタラノキの仲間ですが、割合に少なく、特徴のある冬芽で、樹皮はホオノキのように白く、覚えておいて、開きかけたとき若葉を採りました。高木なので、手の届くところは少なく、幼木のものはかわいそうなので、タラノキのようにはいきません。味について特別な記憶はありません。

小沼周囲の観察路を進むと、チシマネコノメソウが咲いていました。念のため根元の落葉などを除くとロゼット葉がありました。間違いなくチシマネコノメソウということです。まもなく、道端の斜面にヒメイチゲがポツポツと20本程咲いていました。いきなり、近くでウグイスの警戒声（音）がしました。ケキョケキョ…という、いわゆる、「谷渡り」です。音の方を見ると1羽のウグイスが盛んに動いています。近くにもう1羽いました。私でなく、ライバルを追い出そうとしているようです。時期が過ぎるとめったに見えないのに、この頃はよく姿が見えます。赤い葉のニシキゴロモが花を付けて、山側の斜面に幾株もありました。小さなシジミチョウが1頭飛んで来ました。帽子で捕まえ、後翅の斑点を見ました。どうやら、スギタニルリシジミだと思います。名前を確認するだけで家まで持ち帰ることはできません。元の場所に返すか、標本にするしかないのですから。これは全道に分布しています。コツバメ・ミヤマセセリなどと同様に、早春だけに姿を現す昆虫にもスプリング・エフェメラルと言うようになったそうです。ヒナスミレ・フイリミヤマスミレ・タチツボスミレなども咲いていました。キバシリが1羽、飛んできて、小さな鈴の音のように鳴きながら木をらせん状に上り始めました。英名はTree Creeper（木をはうもの）といい、適当な名前かと思えます。キマワリという甲虫がいるので、名前に使えなかったのでしょうか。

大沼前の広場に着くと、別の道から来た、望遠レンズ付きのカメラを抱えた20代の青年に合いました。「何か珍しいものがあつたかい」「いや別に」「小沼の向こうにスミレやヒメイチゲが咲いていたよ」「ヒメイチゲってどんなの」。説明すると、これから大沼を回るので、気を付けて行こうと言う。広場には、若夫婦と2人の子供の1組だけが昼食を広げていました。覚生沼を過ぎ、道々に出ると、カラマツは芽吹きが始まっています。キャンプ場の芝生にヤマネコノメソウがところどころに咲いています。建物の陰から「クワクワ…」と鳴きながら1羽飛び出しました。芝生の樹木の梢で、「ピチョピチョ、ク



ーチル、チュルチュル、チョペー…」のように聞こえる複雑な言い回しで、まだ練習段階ながら、全山に響く声でクロツグミ(カット参照 オス)が鳴いていました。メスとしては、素敵なさえずりや縄張りの良さなどを感じ選ぶのでしょうか。

蘭越町港地区の海岸植物調査

蘭越町 大表 章二

私の住む蘭越町には尻別川が流れていて、日本海に注いでいます。河口部周辺の港地区には南北約4kmにわたって海岸が続き、内陸には見られない海岸植物が生育しています。またそこにはカモ類、猛禽類などの野鳥も生息の場としています。

10年ほど前に日本自然保護協会が「海岸の植物群落を調べよう」を実施した時に、私はこの取り組みに参加した蘭越自然探検隊の一員として港地区の海岸植物の調査を行いました。それ以来毎年数回はここを訪れ、植物や野鳥の観察を続けています。今年また日本自然保護協会が「自然調べ 2016 海辺で花しらべ」を実施したので、これにも参加して少し詳しく調査を行うことにしました。

4kmの区間をA~Cの三つの区域に分け、生育する種子植物の種名を歩きながら記録しています。調査範囲が広く、しかも足元は砂地や岩石で歩きにくく、当初予定したよりも多くの時間がかかっています。

調査は現在継続中ですが、これまでに22種の海岸植物(※)を確認しました。また海岸以外にも生育する在来種は53種、外来種は37種のぼっています。

「海岸の植物群落を調べよう」の調査結果では、全国1308か所のうち、10種以上の種が生育する植物群落は、砂浜で10%、磯浜で3%だったので、調査時期は違いますがこの港地区は全国でも海岸植物が数多く生育している場所だと思います。全国的に出現頻度の高いハマヒルガオ、コウボウムギ、ハマエンドウ、ハマニガナ、オカヒジキなどとともに、出現頻度が低く貴重な種となっているエゾオグルマ(写真参照) エゾスカシユリ ナミキソウ ハマハコベ ハマハタザオ ハマベンケイソウも健在でした。

10年前と比べて、土地の改変も少なく人工物もあまり増えていません。比較的良好な自然環境が保たれているように思えます。海岸の植物の種数も変わらず、以前より群落が大きく広がっている場所も見られます。ただオニハマダイ



コンなどの外来種が海岸近くにまで侵入している状況は以前と同様です。

調査はまだ継続中ですが、実施してよかったですと思っています。全国的な海岸植物の調査に貢献できるということ、そして蘭越という地域の植物相の解明に多少でも役立っていると考えからです。

個人的には今回の調査を通して観察眼や同定能力が確実に向上していることを実感できました。地域の植物や野鳥の調査を始めてから10年ほどになりますが、調査途中で投げ出すとそれまでの苦労が水の泡になると思い、多少苦しくても続けてきました。これがよかったですでしょうか。



また調査中に旅の途中のシギ類に遭遇したり、獲物を捕らえたハヤブサが眼前に現れたり、マムシが岩の間から出てきてびっくりしたり、波打ち際でトドの死骸を発見したり、絶壁をよじ登る人を見かけたり、様々な面白い出会いがありました。このようなことがあるのも調査の魅力の一つでしょう。

また体力増進にも役立っています。巨岩が多くて足を滑らせないように歩くのに神経を使

います。砂地も決して歩きやすいとは言えません。そんな中、時には汗をかきながら、時には強風に調査用紙を飛ばされそうになりながら歩いています。前期高齢者にとってちょうど良い運動になっているようです。認知症予防にもいいかもしれません。

港地区の海岸は地元の人以外は出入りが少なく、たまに釣り人などを見かける程度です。踏みつけなどもほとんどありません。ただ数年前に風力発電所の設置計画が作られ、B区域に2つの発電機が置かれると聞いています。もし完成すればこのB区域(写真参照)は大きな変貌を遂げ、生育する海岸植物に大きな影響を及ぼすこともまた必至と思います。

今後もしできる限り植物の調査を続け、動向を注視し、必要ならば意見を述べていこうと思っています。

※「日本の海浜植物チェックリスト-兵庫県立 人と自然の博物館」(2007年)による。

※最近「白樺山の植物」という写真図鑑を作りました。素人の手作りで、誤りや不十分な点が多いと思いますが、ご希望の方にはPDF ファイルを差し上げますので PC メールでご連絡ください。アドレスは s-om@hb.tpl.jp です。

カラスからのメッセージ

旭川市 池野 由似

こどもが初めて覚える鳥は「カーカー」=『カラス』ということが多いです。こどもたちにとって一番身近で親しみをもてる野鳥だからなのでしょう。空を見上げては「カーカーだ！」と瞳をキラキラさせて嬉しそうに追いかけています。しかし月日が経つと、その無邪気な笑顔が曇り「コワイ！キライ！」と逃げるようになるのです。大人からそのように教わったようでした。

ある日、1枚のカラスの羽を拾い、一緒に観察をしました。「キレイ！キラキラだ〜！」と

再びこどもたちの目が輝きました。外へ出るとカラスの宝物探しが始まるようになりました。自分の見つけた羽を陽にかざしその命の素晴らしさに感動しています。今ではカラスが巣を作ったり、子育てする様子を応援する声もきかれるようになりました。

まるでカラスがこどもたちに～自然を愛する心～のメッセージを羽にのせて届けてくれたようです。白く柔らかな心に読めるメッセージがかかっているのだと思います。

ウオッチングレポート



札幌市「春の北大構内」観察会 2016/4/24

再生されたサクシュ琴似川沿いに遺跡保全庭園まで散策しました。構内に人類遺跡トレイルや建築遺産トレイルなどが多く設置されています。エルムの森で、建物の5段目まで硬い閃緑岩、窓の所から屋根の下までが札幌軟石できている古い建物を見ました。日本の近代昆虫学を築いた松村松年昆虫学者のトレイルか

ら、北大が昆虫のメッカであることを知りました。エゾヤマザクラ、キタコブシ、コウバイ、チシマザクラ、チョウセンレンギョウ、トサミズキ、ハルニレ、ネグンドカエデ、アズマイチゲ、エゾエンゴサク、キバナノアマナ、ミズバショウ、ニリンソウ、ニオイスマレなどの花を見ました。

(須田 節)

小樽市 「旭展望台」 観察会 2016/4/29

春一番の草花をたずねて

春の大型連休初日。

まずはツノハシバミの雄花と雌花の観察から。キクザキイチゲが雨のため白い花被をすぼめて、じっと耐えている様子が印象的。

大きなカタツムリが伸び伸びと動き回る姿が多く見られた。雨が待ち遠しかったのだろうか。

アオジが道端を歩いて何かを探し回っていた。木の枝にはルリビタキが忙しそうにしていた。

いつものカタクリ群落に到着。遊歩道の端からゆるやかな斜面の上まで広がっていて見事。帽子をかぶった松葉のような一年生が、あちらこちらで見えている。ここには7枚の花被をもつカタクリが散在しており、別の遊歩道では1枚の葉で花をつけるカタクリが局在しているのが見られると一人の指導員から報告があり、遺伝の神秘性に参加者の方たちは感動されていました。

(岡部 実)

札幌市北区 「百合が原公園」 観察会 2016/4/30

都市中の公園の北方系の花と鳥たち

百合が原公園にあまり知られていない4つの池があり、この周辺をまわりました。

あられが痛いほど顔に当たる風の強い日でしたが合間に、鳥が姿を見せてくれました。マガモ、ハクセキレイ、シジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、ヒガラ、ハシボソガラス。

例年ですと残雪があり、開花の植物はシナマンサクぐらいでしたが、今日はマグノリヤ、エゾムラサキツツジ、エゾヤマザクラ、ハルニレ、キタコブシ、シデコブシ、シラカンバ、西洋シヤクナゲ、トサミズキ、ハナルリソウ、エゾノリュウキンカ、ショウジョウバカマ、「嵐が丘」に出てくるヒース（エリカ）などの花を観ました。

(須田 節)

恵庭市 「恵庭公園」 観察会 2016/5/14

春の緑につつまれて

快晴に恵まれ、春の緑につつまれながら、咲きほこるニリンソウの中を歩きました。多くの方の参加があり、班を分けての観察会。

ホソバナアマナが増えたのをうれしく思いながら2時間を楽しみました。

(富田智恵)

札幌市手稲区「手稲山」 観察会 2016/5/14

春の息吹を感じよう

澄みきった青空の下、新緑の中10時から歩き始めました。

すぐにウグイスのさえずりで大歓迎。ヒトリシズカやマムシグサの雄花と雌花の違い、レンプクソウの花弁のルーペ観察、シラネアオイの花から想像できない果実を手に取り、ネコノメソウ、ニリンソウ、マイズルソウ、ニリンソウ、

フッキソウなども見ました。

スプリングエフェメラルの一つであるエゾエンゴサクとマルハナバチとアリとの関わりも学習。樹木ではシウリザクラやツリバナの花芽、ホオノキの新葉、ハウチワカエデとイタヤカエデの花なども見ることが出来ました。

(高田敏文)

札幌市豊平区「平岡公園」観察会 2016/5/22

人工湿原の変わる様子を見よう

快晴。朝から暑い。参加者はベテランのリピーターの方々に、花のある場所を案内するだけです。出現順にミヤマザクラの満開、タチツボ

スマレ、ヤマグワ、マイヅルソウ、クルマバソウ、ヒトリシズカ、ミツガシワ、サギスゲなど。人工湿地でトゲウオの巣を観察しました。

(佐藤佑一)

苫小牧市「錦大沼総合公園」観察会 2016/5/22

春の草花たち

公園内の錦小沼の一周を散策すると、岸辺にミツガシワの可憐な姿。

皆感動し、今回参加したことを喜び合いました。散策路からは、フデリンドウ、ニシキゴロモ、スマレ類、ミツバツチグリ、マイヅルソウなど春の花が咲き目を楽しませてくれます。フタリシズカ、コンロンソウ、ヤマハタザオが開

花の準備中で、次から次へと目を離すわけには行かなくなります。

ミズナラ、ヤマモミジ、イタヤカエデなど次から次に葉を開かせ、新緑の清々しさと生命の力強さを感じるとともに、雄花、雌花、種子、芽などの構造や仕組みを少しずつ学習もし、もっともっと自然の仕組みを知り、知識を増やしたいと思いました。夏の観察会に向けて頑張っていきたいと思います。

(白崎 均)

余市町「余市町」観察会 2016/5/22

余市町の自然と史跡を歩こう

昨年に続いて余市駅前から開拓記念碑を見学。ツバメの営巣と飛び交う様に郷愁を感じる。ニッカウキスキーの工場側を通り、リタロードの街路樹、ベニバナトチノキの花を愛で、余市川を眺め、余市岳に連なる山々の残雪や、近くは河口付近に潜ったり羽ばたく鳥を見る。

余市町役場前庭の樹齢160年の水松を直に観察、長寿にあやかる。

ここでリタロードから朝日町の茂入山への坂道を上る。途中、自然を生かした別荘のようなお屋敷のウワミズザクラの満開を見せていただいた。

茂入山上にはサクラが満開で、野口雨情の歌碑と、遼星北斗の歌碑を拝する。

余市水産博物館を見学、余市開拓の努力と郷土愛がひしひしと感じられた。

(本間正一)

苫小牧市「紋別岳」観察会 2016/5/28

春の花・野鳥

当日は晴れ、20℃。風も少なく、良い観察会日和でした。

春紅葉も少し過ぎた時季です。草本で咲いていたのはオオバキスマレ、オオタチツボスマレ、ミヤマハコベ、ヤブニンジン、シラネアオイ、ハクサンチドリ、フデリンドウなど。木本ではオニグルミ、ダケカンバ、ミネヤナギ、ミヤマザクラ、コヨウラクツツジ、ムラサキヤシオな

どでした。

野鳥ではウグイス、ヒガラ、ツツドリ、センダイムシクイなどの声、昆虫ではイタドリハムシ、ハナムグリなど。エゾサンショウウオの卵のうがあり、まだ孵化はしていません。

標高差が600mあるので、オオカメノキの花の様子からも、その変化が判ります。道中、会話や風景の楽しみもありました。

(谷口勇五郎)



参加者の声



小樽市「旭展望台」(2016/4/29)

小樽市 寺島 良子

昭和の日は、生憎の雨模様、雨の日ならではの発見があるかもと早起きして出かけました。

歩き始めてすぐ、最後まで生き延びられるようにと食用になる植物、オオハナウド、ウバユリ、イラクサ等沢山の種類を教えてくださいました。

サバイバルの日が来ませんようにと心に呟きます。一方、アオジ、カケスのお出迎えの後にやってきた幸せの青い鳥、ルリビタキ。

更に、歩みを進めるとカタクリの群落です。一年生のカタクリを見つけました。ひょろっと

黒い帽子を被ってこれがあのカタクリ？かと驚きです。

その目で見ると周り是一年生がいっぱい。カタクリの小路は安泰です。

今度はツルアジサイが木を這って、その根のところから泡状の液体を流しています。木が出しているのか、ツルアジサイが出しているのかわかりません。

不思議、不思議。秘密がたくさん森歩きはやめられません。

恵庭市 「恵庭公園」(2016/5/14)

恵庭市 桑島 則子

自然観察には、恵まれた天候でした。

今日、私は初めての参加でした。

新緑の息吹を感じ、こもれびを浴び川のせせらぎ、小鳥のさえずりを耳にし、たっぷりと五感を働かせて、若がえったようにも思えます。

家事に追われて生活している私にとっては、

日常生活から少し離れた、心地よい2時間でした。

指導員の方の説明も聞き易く、機会をみつめて、又、参加したいと思っています。

お世話になりました。ありがとうございました。

余市町 「余市町の自然と史跡」6/5/22)

余市町 加藤 修

余市町の自然と史跡を歩こう

晴天に恵まれ、余市町を気持ちよく歩くことができました。皆様から教えて頂きつつ楽しむことができました。ツバメ、ヒバリ、カワウ、ハルゼミやピンク色のベニバナトチノキ、宮沢賢治が好きだったウラジロハコヤナギ、余市町の開拓記念碑、余市駅前イチョウの木由来、余市町役場前のオンコの木、よいち水産博物館でのニシン漁の郷土資料と自然と史跡を肌で感じました。皆様に感謝の気持ちです。

日本海全域でニシン漁が栄えていたことが、島牧村、寿都町、岩内町のことは知っていましたが余市町の歴史から理解できました。黒松内町にも会津藩の人々が入っていたことは見聞きしていたが、開拓記念碑のパンフレットに「明治2年に250人が新政府から北海道開拓に向かうと会津藩の再興と藩主の助命がかなうとの情報に応じてアメリカ汽船で小樽到着」とありました。歴史と自然を深く刻めた観察会でした。

2016 年度北海道自然観察協議 会指導員フォローアップ研修会 開催のご案内

北海道自然観察協議会では、観察会実施などの指導員としての活動の充実強化を図るため標記フォローアップ研修会を下記により開催します。会員の皆さまの積極的なご出席、宜しくお願いします。

記

- 1 開催日時
平成 28 年 11 月 26 日(土) 14 時 30 分～16 時 30 分
- 2 開催場所 北海道大学クラーク会館集会室
(札幌市北区北 8 西 7)
- 3 参加費 300 円
- 4 研修内容
『魅力のある自然観察会の進め方』

1)指導員観察会報告

- ・中村 修一理事「帯広の森(2017 年度 NACS-J 自然観察指導員講習会開催予定地)について」
- ・山口 紘司理事「『秘境 浮島湿原を巡る観察会』を開催して」

2)研究討議『魅力のある自然観察会の進め方』

パネリスト：中村理事・山口理事(上記報告者)、山形誠一副会長(観察部長)、池田政明事務局長。

司会：横山武彦会長

5 申込先と申込締め切り

協議会事務局まで。11 月 19 日(土)

なお、研修会終了後に忘年会(場所 大庄水産 札幌読売ビル道支店内)を行います。

【連絡先】

北海道自然観察協議会のホームページ <http://www.noc-hokkaido.org/>

会費や寄付は 郵便振替口座 02710-1-8768

会 計 杉本 泰子 063-0062 札幌市西区西町南 2 丁目 5-5

会費振込加入者名 北海道自然観察協議会 杉本 泰子

Tel/Fax 011-664-9263 E-mail akibare-sawayaka@ma4.seikyoku.ne.jp

観察会保険料は 郵便振替口座 02770-9-34461

観察会担当会計 小川 祐美 047-0155 小樽市望洋台 3-13-5

Tel/Fax 0134-51-5216 E-mail streamy@estate.ocn.ne.jp

観察会報告書・資料は 観 察 部 山形 誠一 064-0946 札幌市中央区双子山 1 丁目 12-14

Tel/Fax 011-551-5481 E-mail seiichi.y@jcom.home.ne.jp

退会、住所変更の連絡は 事務局 池田 政明 001-0045 札幌市北区麻生町 4 丁目 9-16

Tel/Fax 011-708-6313 E-mail ecology@cocoa.ocn.ne.jp

事故発生等緊急時はアスカ・リスクマネジメント 担当 本間氏 Tel 011-873-2655

投稿や原稿は 編 集 部 村元 健治 006-0552 札幌市手稲区星置 2-8-7-30

Tel 011-694-5907 E-mail cin55400@rio.odn.ne.jp

表紙写真 森 繁寿



自然観察 2016 年 9 月 15 日 / 第 119 号 年 4 回発行
(会員の『自然観察』購読料と郵送料は会費に含まれています。)

発行 北海道自然観察協議会
編集 北海道自然観察協議会編集部